

コロナ禍の子どもたちと学校

心も体も健康に育つ場所



子どもは学びの主体であり、教育を受ける権利があります（「子どもの権利条約」より）。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、突然の一斉休校要請がなされるなど、子ども、親、学校現場は混乱しました。また、家庭での虐待など、子どもを通して生活環境を知り、子どもを守る役割も「学校」が果たしていました。今回の事で改めて、「子どもにとっての学校とは？」をもう一度考えます。

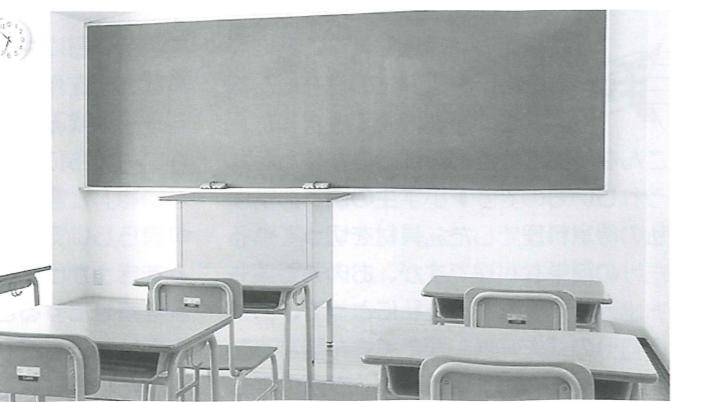
「学習」を保障する取り組み

コロナ禍で学校が閉鎖されている間、子どもの学習を保障する観点から、通学しなくても学ぶ「遠隔（オンライン）教育」の重要性が指摘されました。文科省もICT（情報通信技術）を最大限活用して遠隔で対応する事を進めました。しかし電子機器の整備やネット環境に関して不十分である地域や学校・家庭も多く、公立小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校などでの取り組みの実施状況の調査によれば、オンラインでの指導を取り入れているのは5%に過ぎないという現実が報告されました。（教育新聞2020年6月11日号）

そして繰り返し、緊急事態宣言が出さ

れ、ネット環境が整っていない場所では、回線がパンク状態となりました。大阪市でも同じ問題が起き、市教委は回線を地域ごとに割り振り、1週間に1回、時間も35分だけのオンライン授業になり、その他時間は家庭でのプリント学習や時間をずらしての登校となりました。

障がいを持ってい る子どもが通う支援学校でもオンラインでの授業があり、タブレットの購入が進められました。教員たちが「オンライン授業」だからできることをと創意工夫し



臨時休校などで 子どもたちの受けた影響

学校の休校や外出自粛により、人との接触が制限され、遊ぶことも出来ず、子どもどうしの関りも奪われる中で、「心身ともに不安定になる子」や、運動会や学校行事が中止になったり、部活動などの大会が中止になることで「喪失感を味わう子」もいました。

支援学校でも、学校が休校となり「生活リズムを崩し情緒が安定しない子」や「介助と感染への恐怖」で親子で心身の疲労がどんどん積み重なっている現状が聞かれました。子どもたちに休業中の生活のことを聞くと「コロナのことを考えると嫌な気持ちになる」「学校の友だちと楽しい思い出がつくれなくてとても残念」「学校に行けず、外にも出られずなんかイライラする」と答える子が多くいました。

学力はこれからの学習の進め方を工夫すれば挽回できると思いますが、落ち込んだり傷ついた心を回復させることは、簡単ではないと感じました。

オンライン授業が もたらした良かった事

これまでにも不登校の子どもへの教育の保障について話されてきましたが、具体的な対応は進んでいませんでした。それについて一斉休校によるオンライン授業をしたことでの変化の調査報告がされた県（青森県）があります。

不登校生徒のオンライン参加率の高かった理由をスクールカウンセラーが聞き取り調査を行ったところ、次の4点が分かりました。



①みんなが休んでいるので自分が登校しない事が苦にならない

②オンライン授業という新しい学習形態に興味がある

③周りの子の目を気にせず参加できた

④勉強するのが嫌いなわけではない
不登校の要因の一つに「いじめを除く友人関係の問題」があるため、それが原因で不登校になった子どもは、周囲の目を気にしなくて良いオンライン授業に参加出来たようです。更に、例年ならば4月に学校に通うようになった不登校生徒は日が経つにつれ、学校に通わなくなる傾向が見られたようですが、20年度は登校を続けた生徒の割合が増えたとの事です。（円グラフ参照）

これを受けて、スクールカウンセリングの面談のオンライン化や通常授業もオンライン配信する事で不登校生徒も参加出来、教育を受ける権利の保障が出来るようにしたいと考えていると報告されています。

ます。（教育家庭新聞より引用）

このことは、不登校の子どもだけでなく、病気などで通学ができない子どもがそれまで通学していた友だちと一緒に学ぶことも可能となるなど、「学習できる場所」が選べるきっかけとなったのです。

「学校」は子どものいのちを 守る場所

今回のコロナ禍で学校が突然長期的な休業となり、今まで当たり前に通学していた「学校」を改めて考える機会となりました。「子どもの学ぶ権利」が奪われたことはもちろん、同時に「子どものいのちにかかわる生活環境」にも大きな影響を及ぼしたことも見えてきました。

突然の一斉休校となり、「給食」がなくなったことで日々満足に食事ができない子どもたちのいのちが心配されました。学校は、学習機会と学力を保障するという役割のみならず、発達・成長を保障する役割や、人と安全・安心につながることができる居場所・セーフティネットとして身体的、精神的な健康を保障するという福祉的な役割をも担っていることが再認識されました。

「学校」が子どもの「生存」に直結する大きな役割を担っていること、また「学校」が今後様々な問題を抱える多種多様な子どもたちが選択できる場所になるよう、さらに国や自治体が体制の整備を行う必要があると思います。今一度「学校は何をするところ？」「学ぶとはどういう事？」と考えるチャンスかもしれません。

不登校生徒の登校率

2019年度



2020年度

